

椋山女学園大学

アヴァン・ポップとSFの影響関係： 笙野頼子とクリストファー・プリーストを中心に

著者	長澤 唯史
雑誌名	言語と表現 研究論集
号	6
ページ	47-48
発行年	2009
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00001912/

学園研Cによる研究成果

アヴァン・ポップとSFの影響関係

——笙野頼子とクリストファー・プリーストを中心に

長 澤 唯 史

本研究では、日本の純文学作家である笙野頼子がアヴァン・ポップを名乗り、SF 的想像力と文学的実験性を融合させていること、イギリスの SF 作家 Christopher Priest が、笙野と相通じる問題意識と方向性を備えていることを、具体的な作品分析を通じて検証することで、SF 的・空想的想像力が現代文学・文化の中核を成していること、この両者をまったく異なるコンテキストで生み出した現代の文化や状況がいかなるものであるのかも、理論的に検討することをめざした。

研究計画・方法として挙げたものは以下のとおりである。

1. 作品分析と、それぞれの作品への評価の検討
2. 各作家のテーマ・文体・思想などについての検証とまとめ
3. 日本現代文学およびSF に関する研究の再検討

うち1. については、いまだそれぞれの作家に対する包括的研究がなく、笙野については清水良典『笙野頼子 虚空の戦士』（2002）、プリーストについては *Christopher Priest: The Interaction*（アンソロジー、2005）と、それぞれ一冊があるのみである。従って2. と併せて作品の再読および分析に主眼を置き、各研究書については批判的検討を加えるにとどめた。

以下に結論のみを簡潔にまとめることにする。まず笙野についての清水の論考は、現代日本文学の枠内での笙野の位置づけやその特異性の評価はされているものの、純文学や日本文学を超えた、ジャンル越境的かつグローバルな検証がなされていないことが問題点である。笙野の奔放な想像力の起源が、H. P Lovecraft や筒井康隆らのSF・ファンタジー作家らを経由してゴシックロマンへと遡ること、とくにその作品に一貫して現れるグロテスクな身体変容（Metamorphosis）のモチーフは、日本的な文学伝統よりもゴシック的な伝統へ接続されるのではないか、という点が今回の研究で確認されたことである。一方、現代的な政治・社会状況とアヴァン・ポップの関わり、という点については、『論座』2008年6月号（朝日新聞社）の「特集 笙野頼子」に寄稿した「そして笙野頼子は発見される——近代の限界に出現した〈アヴァン・ポップ〉の共振」にまとめてあるので、参照されたい。

クリストファー・プリーストについては、笙野とは逆にSF ジャンル内での評価・研究が主で、より広い文学状況との相互参照は行われていない。とくに *The Affirmation*（1981）以降の、SF というより幻想文学的作品について、明確に Metafiction/Postmodernism との共通性、というよりその典型とも言ってよい特徴が認められるにもかかわらず、SF ジャンルの内外でその作品が注目されることはいまだに少ない。これはSF ジャンルの閉鎖性とアメ

リカ中心の研究体制の弊害であろう。プリーストの現代文学性については、最新作 *The Separation* (2002) が、Philip Roth の *The Plot Against America* (2004) とほぼ同時発生的に、第二次大戦の歴史を書き換える歴史改変小説の形式をとりながら戦争と文学の関わり方に深い洞察を示していることを、日本英文学会関西支部第三回大会（2008年12月20日、関西学院大学）のシンポジウム「戦争と文学」において、「戦争とSF：歴史改変への欲望」と題する発表で明らかにした。

今後は本年度の研究を踏まえて、この両作家それぞれについての研究をまとめることを目指したい。

ビジネスで使える英語のためのワークショップの 効果に関する研究

塚田守、長澤唯史、笠原正秀

研究成果の概要

本研究の目的は、英語圏への留学体験を持ち、優れた英語能力を有する学生に対して、ネイティブ・スピーカーが参加するワークショップを提供したり、学生同士で英語で議論をする訓練を通して、ビジネスで使える英語力を身につける効果について検証することであった。本学部は、中期留学、交換留学に参加して、一定の英語力を身につけた学生がいるが、この学生たちがビジネスで通用するほどの英語力を身につけているかどうかは現段階では疑問である。そこで、そのような学生を本プロジェクトである「自主セミナー」に参加させて、そのセミナーへの参加前と参加後の変化について研究しようとしたものである。

このセミナーの効果測定は、少数グループのみの参加であったことから、数量的な測定によるものではなく、参加学生が「参加レポート」として書いたものを読み解くことにより、その効果を考察したものである。この報告を今後の学部全体の英語学習改善への参考にした。詳細については、『ビジネスで使える英語のためのワークショップの効果に関する研究——学園研究助成（C）2008年度報告書』にあるが、ここではその目次だけを示しておく。

報告書の目次

1. 学生への募集活動、
 2. 代表的なセミナーの学生による報告
 3. 参加学生のレポートとその分析、
 4. 参加教員によるレポート
 5. 学外活動への参加：京都外国語大学の「ペア・トーク」参加学生におけるスピーチ草案作成のプロセスとその分析、
- まとめ：今後の課題